「南方隨筆」底本正字化版「俗傳」パート

南方熊楠　睡人及死人の魂入替りし譚　（全三回）

藪野直史オリジナル注附

［やぶちゃん注：本論考は「一」が大正三（一九一四）年七月発行の『人類學雜誌』二十九巻七号に初出され、「二」が同年十月の同じ『人類學雜誌』二十九巻十号に、「三」が翌大正四年一月の『人類學雜誌』三十巻一号に初出されたもので、後の大正一五（一九二六）年五月に岡書院から刊行された単行本「南方隨筆」に収録された。

底本は同書初版本を国立国会図書館デジタルコレクションの原本画像（ここが冒頭）で視認して用いた。但し、加工データとしてサイト「私設万葉文庫」にある電子テクスト（底本は平凡社「南方熊楠全集」第二巻（南方閑話・南方随筆・続南方随筆）一九七一年刊で新字新仮名）を加工データとして使用させて戴くこととした。ここに御礼申し上げる。

実は、本篇は「選集」版を「睡人および死人の魂入れ替わりし譚」として古くに公開しているが、今回のものが、正規表現版となる。「一」は例によって、南方熊楠の文章はベタで続くので、「選集」を参考に段落を成形し、そこに注を挟んだ。不審な箇所は引用原本や「選集」で訂したが、それはいちいち注記しなかった。］

睡人及死人の魂入替りし譚　一

（人類二七卷五號三一三頁參照）

倭漢三才圖會卷七一に、伊勢國安濃郡内田村長源寺。相傳曰、昔當地人與日向國旅人、會避暑於堂之檐、互不知熟睡日既暮、有人倉卒呼起之、兩人周章覺、其魂入替而各還家、面貌其人而心志音聲甚異也、家人不敢肯、兩人共然、故再來于此復熟睡、則夢中魂入替如故、諺曰伊勢也日向之物語者是也。或紀曰、推古天皇三十四年三月壬午日五瀨國黃葉縣、佐伯小經來死、三日三夜而蘇、日向國小畠縣謂依狹晴戸者同日死同日蘇、不知妻子及所柄鄕村名、五瀨者語日向、日向者語五瀨、父子鄕村名分明、其子弟互至、相問符合、何以然也、兩人同時死、共至冥府、黃泉大帝議曰、兩人命未、宜還於鄕、冥使率之來誤差其魂尸、兩家子弟深不審之問焉縣社、明神託巫告曰、冥使通明、何有所誤、人不知魂鬼、又多疑冥府、冥帝知之、證之敎之、如此而已、其身雖我等父、心卽非我實父、心非父身無由、父亦以不爲子、願欲替父、朝廷下府任父子願、仍小經來至於日向、晴戸至五瀨如故、而行業鄕名亦替之。

［やぶちゃん注：「選集」では、標題の添え辞として、二行で、『南方「睡眠中に靈魂拔け出づとの迷信」一節參照』／『『人類學雜誌』二七卷五号三一三頁』とある。これは、先に電子化注した「睡眠中に靈魂拔出づとの迷信　一」のことで、本篇の頭の「和漢三才図会」のそれは、そこで、もう既に触れている内容である。『「和漢三才圖會」卷第七十一「伊勢」の内の「當國　神社佛閣各所」内の「長源寺」の記載』として電子化注もしてある。しかも、熊楠の引用にはひどい誤りがあって、そのまま読むと、意味が分からなくなる箇所があるので、そこは、私の所持する原本で修正してある。そんなわけで、訓読文はそちらにあるので、今回は本文挿入していない。］

此後話の方は死人の魂他人の尸［やぶちゃん注：「しかばね」。］に入替りて蘇生後身邊の事を一切知らず、故鄕の事のみ語りし、と言へるに反し、前話の方は睡中兩人の魂入替り乍ら、その體各［やぶちゃん注：「おのおの」。］異人の魂を具して故鄕へ歸れりとする

者なれば、此話を作り又信ぜし人々は、人體自ら特異の方角識を有し、萬一他人の魂本來の魂と入替りて之に寄るとも、其體は在來の方角識の儘に故鄕を指して歸り去る筈と心得たるを證す。事頗る奇怪なる如きも、狂人の精神夢裡の思想全く別人同樣變り果たるも、尙ほ身體の動作は多少本人在來の通りなる例多きを參すれば、此前話は精神變態學上の面由き材料たりと思はる。

［やぶちゃん注：「方角識」「選集」では以上に『センス・オヴ・ジレクシヨンス』のルビを振っている。Sense of Direction。

次の段の漢文は後に推定訓読を附した。］

扨此話を英譯して、一九一二年十一月卅日のノーツ、エンド、キーリスに出し西洋にも斯る譚有りやと問ひしも一答文だに出ざりし。但し支那に類話あるを近日自分見出したれば爰に揭ぐ、酉陽雜俎（著者段成式は西曆八六三年死せり）續集三に云く、開元末、蔡州上蔡縣南李村百姓李簡癇疾卒、瘞後十餘日、有汝陽縣百姓張弘義、素不與李簡相識、所居相去十餘舍（一舍は卅五里［やぶちゃん注：唐代の一里は五百六十メートル。二十キロメートル弱。］）、亦因病死、經宿却活、不復認父母妻子、且言我是李簡、家在上蔡縣南李村、父名亮、驚問其故、言方病時夢有二人、著黃齎帖、見追行數里至一大城、署曰王城、引入一處、如人間六司院、留居數日、所勘責事悉不能對、忽有一人自外來、稱錯追李簡可即放還、一吏曰李簡身壞、須令別處受生、因請却復本身、少頃見領一人至、通曰追到雜職汝陽張弘義、吏又曰弘義身幸未壞、速令李簡託其身以盡餘年、遂被兩吏扶持却出城、但行甚速、漸無所知、忽若夢覺、見人環泣及屋宇、都不復認、亮訪其親族名氏及平生細事、無不知也、先解竹作、因自入房、索刀具破篋成器、語音舉止信李簡也、竟不返汝陽、（南李村に歸り、父亮と共に棲し也）時成式三從叔父攝蔡州司戶、親驗其事、昔扁鵲易魯公扈趙齊嬰之心、及寤互返其室、二室相諮、以是稽之非寓言矣《開元［やぶちゃん注：盛唐の七一三年から七四一年。］の末、蔡州上蔡縣南李村の百姓李簡、癇疾にて卒す。瘞(うづ)めて後、十餘日、汝陽縣の百姓張弘義、素とより、李簡と相ひ識らず、居(を)る所も、相ひ去ること十餘舍にして、亦、病ひに因つて死し、宿(ひとよ)を經て、却(かへ)りて活(いきか)へる。復(ま)た父母・妻子を認(みし)らず、且つ言ふに、「我れは、是れ、李簡、家は上蔡縣南李村にあり、父の名は亮なり。」と。驚きて、その故を問ふに、言はく、「方(まさ)に病める時、夢に二人有り、黃なるを著け、帖を齎(もたら)す。追(ひつた)て

られて行くこと、數里、一の大城に至る。署して「王城」とあり。引かれて一處に入るれば、人間の六司院のごとし。留まり居ること、數日、勘責せらるること、悉く對ふる能はず。忽ち、一人の、外より來たる有り、稱すらく、「錯りて李簡を追ててり。即に放還すべし。」と。一吏曰はく、「李簡の身は壞ちたり。須らく別に生を託すべし。」と。［やぶちゃん注：ここに引用の省略がある。「選集」ではそこがあり、引用原本では、「時憶念父母親族、不欲別處受生」で、「選集」では訓読されて、「時に父母・親族を憶念し、別處に生を受くるを欲せず。」となっている。］因りて復び本の身に却らんことを請ふ。少頃ありて、一人を領れて至るを見る。通して曰はく、「雜職の汝陽の張弘義を追てて到れり。」と。吏、又、曰はく、「弘義の身、幸ひに、未だ壞れず。速やかに李簡をして其の身に託して、以つて餘年を盡さしめよ。」と。遂に兩吏に扶持へられ、城より却り出づ。但、行くこと、甚だ、速やかにして、漸として知る所無し。忽ち、夢の覺むるがごとく、人の環みて泣くと、屋宇とを見る。都て復た認らず。亮、其の親族の名・氏及び平生の細事を訪ふに、知らざる無し［やぶちゃん注：よく知っている人物であったのである。］。先に竹の作を解くせり。因りて、自ら、房に入り、刀具を索め、篋［やぶちゃん注：竹の表面。］を破りて器を成す。語音も擧止も、信に李簡なり。ついに汝陽に返らず。時に、成式［やぶちゃん注：本書に著者段成式。］が三從［やぶちゃん注：母方の叔父のことか。］の叔父は、蔡州の司戸を攝ね、親しく素の事を驗せり。昔、扁鵲は、魯の公扈と趙の嬰齊との心を易へ、寤むるに及びて、互ひに其の室に返り、二室、相ひ諮る、と。是れを以つて之れを稽ふるに、寓言には非ざるなり。》。焉に言る［やぶちゃん注：「ここにいへる」。］扁鵲の故事は、現存此類話中最も古き者らしく、列子湯問篇に出たり。

（大正三年七月人類第二十九卷）

［やぶちゃん注：「扁鵲」春秋戦国時代の伝説的な医者で中国医学の祖。インドの耆婆と並ぶ名医とされる。当該ウィキによれば、『扁鵲の活動の始まりは紀元前』六五五『年の虢』（かく）『という小国の滅亡で、活動の終わりは紀元前』三五〇『年の秦の咸陽への遷都であり』、これは彼が三百『年近く』も『生きていたことになる』とある。

「列子湯問篇に出たり」「列子」は生没年不詳で、中国古代の思想家。道家の代表者、又。その著作とされる書物を指す。名は禦寇。鄭の人で、老子の弟子或いは関尹子の弟子、又

は老商子の弟子などと言われ、荘子の先輩ともされるが、その事績は不明。「列子」や「荘子」の書中に列禦寇の説話が見えるものの、孰れも事実とは認め難く、ために、人物の実在を疑う説もある。当該部は以下。訓読は所持する岩波文庫（一九八七年刊）の小林勝人氏の訳を参考にした。

＊

魯公扈、趙齊嬰二人有疾、同請扁鵲求治。扁鵲治之。既同愈。謂公扈、齊嬰曰、「汝曩之所疾、自外而干府藏者、固藥石之所已。今有偕生之疾、與體偕長、今爲汝攻之、何如。」。二人曰、「願先聞其驗。」。扁鵲謂公扈曰、「汝志彊而氣弱、故足於謀而寡於斷。齊嬰志弱而氣彊、故少於慮而傷於專。若換汝之心、則均於善矣。」。扁鵲遂飲二人毒酒、迷死三日、剖胸探心、易而置之、投以神藥、既悟、如初。二人辭歸。於是公扈反齊嬰之室、而有其妻子、妻子弗識。齊嬰亦反公扈之室、有其妻子、妻子亦弗識。二室因相與訟、求辨於扁鵲。扁鵲辨其所由、訟乃已。

（魯の公扈、趙の齊嬰の二人、疾ひ有り、同じく扁鵲がもとへ請りて治を求む。扁鵲、之れを治す。既に同に愈えたり。公扈・齊嬰に謂ひて曰はく、

「汝らが曩に疾む所は、外よりして府藏を干す者にして、固より藥石の已やす所なり。今、偕生の疾ひ［やぶちゃん注：先天的疾患。］有り、體と偕に長ず。今、汝らが爲めに之れを攻めんは、何如。」

と。二人、曰はく、

「願はくは、先づ其の驗を聞かん。」

と。

扁鵲、公扈に謂ひて曰はく、

「汝は、志、彊くして、氣、弱し。故に謀に足りるも、斷に寡し。齊嬰は、志、弱きも、氣は彊し。故に慮に少けて、專に傷る［やぶちゃん注：独断専行して、失敗する。］。若し汝らの心を換へなば、則ち、善きに均しからん。」

と。

扁鵲、遂に、二人に毒酒を飲ましめ、迷死せしむること［やぶちゃん注：仮死状態にさせること。］、三日、胸を剖き、心を探り、易へて、之れを置き、投ずるに、神藥を以つて

す。既に悟むれば、初めのごとし。二人、辭して歸る。是に於いて、公扈は齊嬰の室に反りて、其の妻子を有せんとせしが、妻子は識らず。齊嬰も亦、公扈の室に反りて、其の妻子を有せんとせしが、妻子も亦、識らず。二の室、因りて相ひ與に訟へて、辨を扁鵲に求む。扁鵲、其の由る所を辨かにして、訟へ、乃ち、已みぬ。）

＊］

睡人及死人の魂入替りし譚　二

（人類二七巻五號三一三頁と二九巻七號に追加す）

押上中將頃ろ［やぶちゃん注：「このごろ」。］聊齋志異十六巻を惠送せられ言く、此中に死人の魂、他の死人の身に入替る話一、二有りしと記憶すと。予多忙中全論を通覽せざれど、其第一巻に次の一條あるを見出し得たれば報告す、云く長清僧某道行高潔、年八十餘猶健、一日顚仆不起、寺僧奔救、已圓寂矣、僧不知自死、魂飄去至河南界、河南有故紳子率十餘騎、按鷹獵兎、馬逸墮斃、魂適相値、翕然而合、遂漸蘇云々、張目曰、胡至此、衆扶歸入門、則粉白黛綠者、紛集顧問、大駭曰、我僧也、胡至此、家人以爲妄、共提耳悟之、僧亦不自申解云々、酒肉則拒、夜獨宿云々、雜請會計、公子托以病倦、悉謝絶之、惟問、山東長清縣云々、翌日遂發抵長清云々、弟子見貴客至云々、答云、吾師曩已物化、問墓所。群導以往、則三尺孤墳荒草猶未合也云々、既而戒馬欲歸、囑曰、汝師戒行之僧、所遺手澤宜恪守云々、既歸云々、灰心木坐、了不勾當家務、居數月、出門自遁直抵舊寺、謂弟子、我卽汝師、衆疑其謬、相視而笑、乃述返魂之由、又言生平所爲悉符、衆乃信、居以故榻、事之如平日、後公子家、屢以輿馬來、哀請之、略不顧瞻、又年餘、夫人遣紀綱至、多所饋遺、金帛皆却之、惟受布袍一襲而已、友人或至其鄉、敬造之見其人默然誠篤、年僅而立、而輒道其八十餘年事《長清の僧某は、道行高潔、年八十餘にして、猶ほ、健やかなり。一日、顚び仆れて起きず、寺僧、奔り救ふも、已に圓寂せり。僧、自ら死せしを知らず、魂、飄へりて去つて河南の界に至る。河南に故き紳子有り、十餘騎を率いて、鷹を按じて、兎を獵る。馬、逸りて、墮ちて斃る。魂、適ま相ひ値ひ、翕然として［やぶ

ちゃん注：現代仮名遣「きゅうぜん」。集まるさま。一致するさま。］合す。遂に漸く蘇へる云々。目を張りて曰はく、「胡ぞ此こに至るや。」と。衆、扶けて歸りて門に入れば、則ち、粉白黛綠の者、紛りて集まり、顧みて問ふに、大いに駭きて曰はく、「我れは僧なり。胡ぞ此に至れるや。」と。家人、以つて、「妄」と爲し、共に耳を提りて、之れを悟ますんとす。僧も亦、自ら申解せず云々。酒・肉は、則ち、拒み、夜は獨り宿ぬ云々。［やぶちゃん注：使用人たちが。］雜りて會計を請ふも、公子、病ひに倦むを以つてと托け、悉く、之れを謝絶す。惟だ、山東長清縣のことを問ふ云々。翌日、遂に發して長清に抵る云々。弟子、貴客の至るを見る云々。答へて云はく、「吾が師は曩に已に物化せり。」と。墓所を問へば、群れ、導きて、以つて往けば、則ち、三尺の孤墳にして、荒草、猶ほ、未だ合はざるなり［やぶちゃん注：蔽われてはいない。遷化から未だ時が経っていないことを指す。］云々。既にして馬を戒へて歸らんと欲し、囑して曰はく、「汝らの師は、戒行の僧たり。遺す所の手澤、宜しく恪守すべし［やぶちゃん注：謹んで守りなさい。］。」と云々、既に歸りて云々。灰心木坐して［やぶちゃん注：気が抜けたようになるさま。］、了に家の務めを勾當らずなりぬ。居ること數月、門を出でて、自から、遁れ、直ぐに舊の寺に抵り、弟子に謂はく、「我れ、即ち、汝らが師なり。」と。衆、其の謬れるを疑ひ、相ひ視て笑ふ。乃ち、返魂の由を述べ、又、生平の爲す所を言へば、悉く、符せり。衆、乃ち、信じ、故の榻［やぶちゃん注：腰掛け。］を以つて居らしめて、之れに事ふるに、平日のごとし。後、公子の家、屢ば、輿・馬を以つて來たり、之れを哀請するも［やぶちゃん注：帰宅を懇請するも。］、略かも顧瞻せず［やぶちゃん注：顧みない。無視する。］。又、年餘して、夫人、紀綱を遣して至り、饋遺［やぶちゃん注：布施。］する所、多しといへども、金帛は皆、之れを却け、惟だ、布袍一襲を受くるのみ。友人、或いは、其の鄉に至り、敬して之れに造るに、其の人、默然として誠篤なるを見る。年は僅かに而立［やぶちゃん注：三十歳。］、而れども、輒ち、其の八十餘年もの事を道ふ。》。

（大正三年十月人類第二十九號）

［やぶちゃん注：以上の「聊齋志異」の引用は事前に縦書ルビ附きで柴田天馬氏の素敵な現代語訳を公開してある。そこで「中國哲學書電子化計劃」の同書当該話の影印本をリンクさせてもある。但し、熊楠の引用には、若干、漢字表記に不審があるので（或いは参考底本が

私のものと異なるだけなのかも知れないが)、そこは修正し、《 》でオリジナルに訓読を附した。

「人類二七巻五號三一三頁と二九巻七號」前者は『「南方隨筆」底本正字化版「俗傳」パート「睡眠中に靈魂拔出づとの迷信　一」』を、後者は『「南方隨筆」底本正字化版「俗傳」パート「睡人及死人の魂入替りし譚　一」』を指す。

「押上中將」陸軍中将押上森蔵（安政二（一八五五）年～昭和二（一九二七）年）。岐阜生まれ。台湾守備混成第一旅団参謀長・東京陸軍兵器本廠長・陸軍砲兵大佐・陸軍少将・陸軍兵器本廠長を経て、陸軍中将として旅順要塞司令官を務めた。南方熊楠との交際機縁は不詳。

「聊齋志異」私が小学生高学年より実に五十年も偏愛し続けている清初の蒲松齢（一六四〇年～一七一五年）が書いた文語怪奇短編小説集。全約五百話。一六七九年頃に成立し、著者の死後、一七六六年に刊行された。」

睡人及死人の魂入替りし譚　三

（二七巻五號三一三頁、二九巻七號二八九頁、十號四一六頁に追加す）

今昔物語巻二十に讃岐國女行冥途、其魂還付他身語第十八《讃岐の國の女、冥途に行きて其の魂（たましひ）還りて他（ほか）の身に付きける語（こと）第一八》あり。芳賀博士の攷證本に其出處として日本靈異記巻中、閻羅王使鬼受所召人所饗而報恩縁《閻羅王の使ひの鬼、召す所の人の饗（あへ）を受けて恩を報いる縁》を出し、類語として寶物集巻六を引き居る。先づ死人の魂が他の屍體に入替つた譚の本邦で最も古く記されたのは件の靈異記（嵯峨帝の時筆せらる）の文だらう。今昔のも靈異記のも長文故、寶物集の斗り爰に引く云く、

讃岐國に依女と云者有り、重き病を受て命終ぬ。父母悲みの餘りに祭を爲したりければ、鬼共祭物を納受してけり。鬼神の習ひ祭物を受用しては空くて止む事無きが故に、同名同姓のものに取替てけり。

故の召人の依女を返し遣はすに、物騒しく葬送を疾く爲したりければ、犬烏食散して跡形無かりければ、今の召人が體に故の召人の依女が魂を入てけり。卽蘇生して物を云に、

形は我娘なりと云ども我をも見知らず。物云へるも替れり。故の依女が父母此事を傳聞て、行て見れば、形は我娘に非ずと云ども我等を見知りて泣喜び、物言ふ聲違ふこと無し。此故に四人の父母を持たり。諸法の空寂なること今生すら此如、いはんや流轉生死の空寂推て知り給ふべき也。

（大正四年一月人類第三十卷）

［やぶちゃん注：一部が不自然なので、一段落を増やした。漢文脈部分は後に《　》で訓読を挿入した。

「二七巻五號三一三頁、二九巻七號二八九頁、十號四一六頁」前二者は「二」の私の注を参照。最後のそれはこの前のその「二」のこと。

『今昔物語巻二十に讃岐國女行冥途、其魂還付他身語第十八あり』これは事前に『「今昔物語集」巻第二十　讃岐國女行冥途其魂還付他身語第十八』として電子化注しておいたので、そちらを読まれたい。また、冒頭注で、原拠の「日本靈異記」も国立国会図書館デジタルコレクションで「群書類従」版の当該部をリンクさせてある。両者は相同性が強いので電子化していない。悪しからず。

「寶物集」（ほうぶつしふ）は鎌倉初期の仏教説話集。平康頼作。治承年間（一一七七年～一七八一年）の成立か。鬼界ヶ島から赦免されて京に帰った康頼が、嵯峨の釈迦堂（清涼寺）に詣でて、参籠の人々との語らいを記録したという結構を持つ。世の中の真の宝は何かについて語り合われ、まず「隠れ蓑」、次いで「打ち出の小槌」・「金（こがね）」と，順次に、これこそ第一の宝であるとするものがもち出されるものの、最後に、僧によって、仏法が第一の宝であると主張され、その僧が例話を挙げて、そのことを説明する構成となっている。法語的説話集の先駆けとなり、「撰集抄」・「発心集」などに影響を与えた。熊楠の引用は甚だ読み難いので、以下、底本を国立国会図書館デジタルコレクションの昭和二（一九二七）年富山房刊の当該部を視認しつつ、所持する岩波の「新日本古典文学大系」版も参照して読み易く手を加えて電子化した。所持本では巻第六に載る。**但し、これには、話の筋を取り違えた致命的な箇所があり、熊楠はこれを引用すべきではなかった（後述）。**

＊

吾が朝には、讃岐國に依女（いぢょ）といふ者あり。重病を受けて、命、終りぬ。

父母、悲しみのあまりに、祭をなしたりければ、鬼共、祭物を納受してげり。［やぶちゃん注：過去の助動詞「けり」に同じ。完了の助動詞「つ」の連用形に、過去の助動詞「けり」が付いた「てけり」が、院政期頃より、撥音が添加されて「てんげり」となったものの、「ん」無表記。軍記物や説話集などに用いられた。「なめり」を「なんめり」と読まねばならぬのなら、これも「てんげり」と読まねばならぬ。］

鬼神の習ひは、祭物を受用しては、空しくて止む事なきが故に、同名同姓の者に取替へてげり。

故の召人の依女を歸し遣はすに、物騒がしく、葬送を疾くしたりければ、犬烏［やぶちゃん注：「南方隨筆」は「犬鳥」と誤字しているので訂した。］食ひ散らして、跡形もなくなりければ、今の召人の依女が骸に、故の召人の依女が魂を入れてげり。

則ち、蘇へりて、ものを云へば、

「形は我が娘なりといへども、我をもみしらず。」

物を云へる聲も替はり、故の召人の依女が父母、この事を傳へ聞きて、行きて見れば、

「形は我が娘にあらずといへども、我れを見知りて、なき悅ぶ。もの云ふ聲、違ふ事なし。」

此の故に、四人の父母を、もちたり。

諸法の空寂なる事を。今生すら、此くの如し、況や流轉生死の空寂、推して、知り給ふべきなり。

＊

「空寂」宇宙の有形無形の一切は、その実体・本性が空であって、思惟分別を超えていること。さて。「今昔物語集」の話と比べて、齟齬を感じ、ごちゃついて、よく判らない展開となっていることに気づく。則ち、**入れ替える相手が誤って逆転してしまっている**のである。なお、「選集」では「依女」に『よりひめ』のルビを振る。］